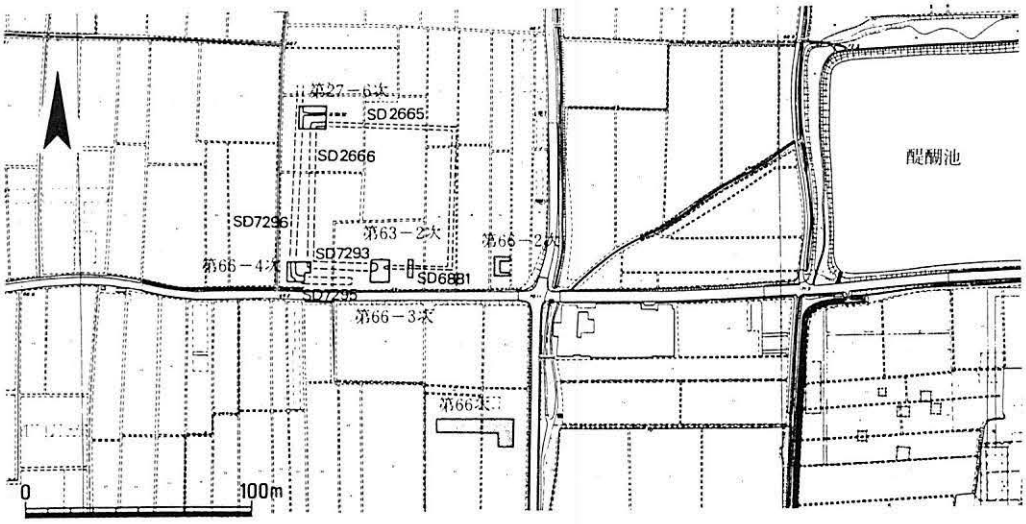
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1991年度は藤原宮跡内で12件，京跡で８件の発掘調査を行った（10頁一覧参照）。これらのうち，京の半数近くは住宅建設等に伴う小規模な調査なので割愛し，主要な調査にしぼって報告する。なお，宮東方官衙地区の第67次調査は本年度に開始したが，調査の主体は1992年度に持ち越したため，報告は次年報に送る。

１．藤原宮跡

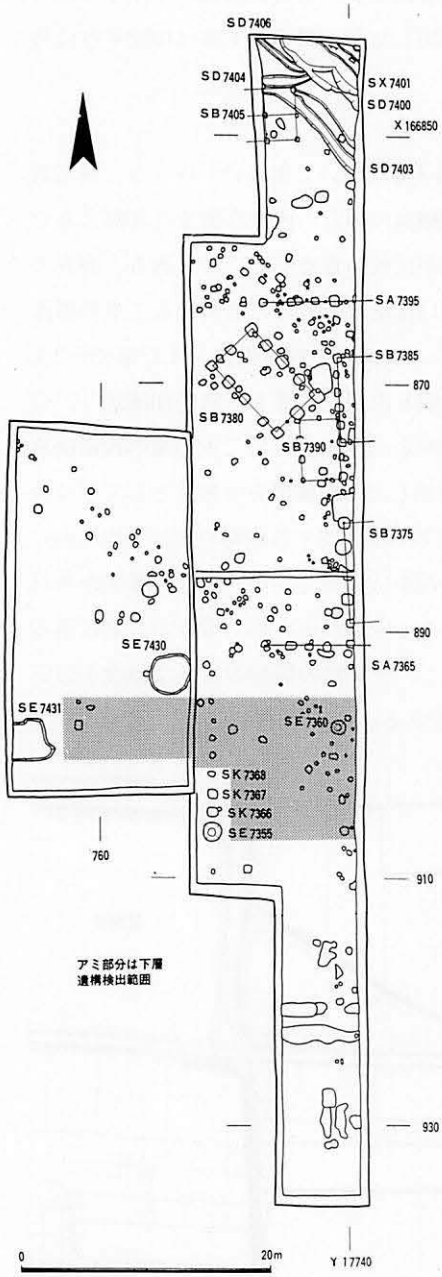
西方官衙地区の調査　第66－2・3・4次調査は，橿原市縄手町において相次いで行った，住宅新築および駐車場造成に伴う事前調査である。調査地は醍醐池の西方，西方官衙地区北部にあたるが，後世の削平が著しく，宮跡内としては宮期の遺構が比較的希薄なところである。調査の結果，藤原宮期の遺構はまったく検出できなかったが，14世紀頃のものと思われる二重の環濠を巡らせた正方形の区画が明らかになった。かつて第27－6次調査で西北隅部，また第63－2次調査で南辺の一部を検出していた濠による区画の，西南隅と南辺中央部を今回追加確認し，全体の規模を想定できるようになったのである。すなわち第66－4次調査区で二重の濠の西南隅を確認，濠内区画の南北長は約65ｍ，第66－3次調査区で検出した内濠鞍部を中軸線として東に折り返すと東西も約65ｍとなる。外濠で囲まれた区画の外寸は76ｍ，内・外濠間の幅は平均4.2ｍ。この空閑地に土塁あるいは築地のような施設があったか否かは定かでない。両濠の埋土から14世紀を主体に若干13世紀代のものを混えた土器が出土した。区画が正方形で環濠が二重に巡るところは，通常の中世環濠集落のあり方とは様相を異にし，土豪層の居館のような施設を想定すべきであろうが，内部の実態が未だ不明なので判断は控える。



藤原宮跡第66－３・４次調査環濠区画復原図

第68次調査は橿原市四分町で実施した，市営団地立て替えに伴う事前調査である。調査地は西方官衙地区南部にあたり，弥生時代の集落遺跡である四分遺跡が広がるところでもある。調査は東区・西区に分けて行ったが，まとめて報告する。

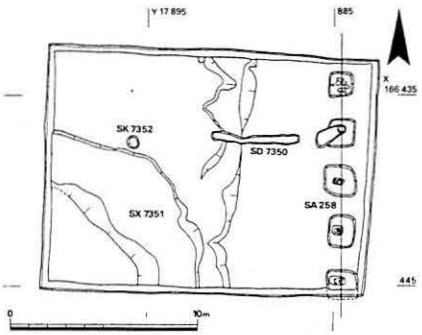
上層遺構には掘立柱建物・塀，井戸，土坑，溝などがあり，これらは古墳時代・7世紀前半代・7世紀後半～藤原宮期に分けられる。古墳時代に属するのは井戸 SE7355・ SE7360・ SE7430と斜行する大溝 SD7400など。井戸はいずれも素掘りで，古墳時代後期の土器が出土した。溝 SD7400は幅5.5m以上，深さ1.8m。中央部には，流れに沿って机の天板を転用した板材や杭による木組の施設が設けられている。体積土上層から5世紀後半～6世紀の，下層から4世紀末～5世紀初頭の土器が出土した。7世紀前半代の遺構には掘立柱建物 SB7380がある。桁行4間（柱1.8m），梁間2間（1.9m）で，北で西に45度振れる。この振れは溝 SD7400や東隣接地の第59次調査で検出した弥生時代後期の水田遺構の方位と一致し，地形に制約された土地利用が長期間続いたことを示している。7世紀後半から藤原宮期にかけての遺構には掘立柱建物4棟・塀2条，井戸1基，土坑多数のほか，一辺0.6m前後の柱穴があるが建物としてはまとまらない。建物 SB7375と SB7385は西側柱筋を揃えて建つ南北棟で，柱間寸法は2.1mと1.4mのそれぞれ等間。南北に東西塀 SA7365・7395を伴う。SB7405はそれらの西北方にある総柱建物で，南北2間（柱間2.0m），東西1間以上（2.4m）の規模である。井戸 SE7431は，抜取穴から出土した井戸枠から，本来は横板組の井戸とみられる。掘形は上幅で一辺約3m，深さ1.7m，2段に掘り込まれており，底部から藤原宮期の土師器杯・甕や須恵器平瓶などがまとまって出土した。



藤原宮跡第68次調査遺構図（1：600）

東西に長くあけた下層用の調査区において，緑灰色粘土（地山）面で多数の柱穴・土坑・溝を検出した。いずれも弥生時代中期に属する。中には直径が30cm を超えるヤマグワやケヤキの柱根を残す柱穴もあるが，建物としてはまとまらない。なお，今回調査区の範囲内では水田の遺構は確認できなかった。

西面・南面大垣の調査　橿原市縄手町における第66－11次調査は住宅新築，同飛騨町の第66－9次調査は下水道埋設工事に伴う事前調査である。66－11次調査では西面大垣SA258の柱穴を5個検出，柱の直径は30cm，柱間は2.6mである。大垣の西3mあたりから地山が西へ向かって大きく下降，その上に木質物・瓦器を含む堆積層を確認した。これは西外濠そのものではないが，中世までその幅を広げて周辺の水を集める基幹水路として機能していたことを示す。



藤原宮跡第66－11次調査遺構図（1：400）

66－9次調査は幅0.8m，南北長49mという狭い範囲の調査であったが，南面大垣SA2900の柱穴2個と内濠・外濠の一部を検出した。

2．藤原京跡

左京十一条三坊の調査（雷丘北方遺跡第1・2次調査）　雷丘北方遺跡第1次調査は，藤原宮第66－1次調査として，高市郡明日香大字雷でおこなった。県道新設によって移転する民家住宅の新築に伴う事前調査である。調査地は雷丘の北北西約200m，低い丘陵の西に広がる緩やかな斜面上の水田である。西方約100mには飛鳥川が西北流し，その氾濫原を示す地形が調査地の西端部まで及んでいる。藤原京の条坊では左京十一条三坊西南坪にあたる。第1次調査の結果，7世紀後半から奈良時代にかけての大規模な四面庇付東西棟建物とその西方に廊状に並ぶ2条の南北柱穴列を検出，四面庇建物は西南坪の中軸線にほぼ合致し，この建物を中心に回廊が巡る空間が想定された。建物の構造・規模や廊を伴う形態などから見て，官衙あるいは宮の可能性があり，きわめて重要な遺跡であるとの認識から，県道敷設予定地とその隣接地を対象として，遺跡の範囲確認を目的として行ったのが第2次調査（藤原宮第66－13次）である。その結果，廊と考えた遺構は17間×2間の身舎の東西に庇が付く長大な南北棟建物で，しかも南北に2棟が並ぶこと，外周には掘立柱の塀と溝を巡らせていることなどが判明，遺跡の規模は少なくとも南北2坪にわたることが確実となった。

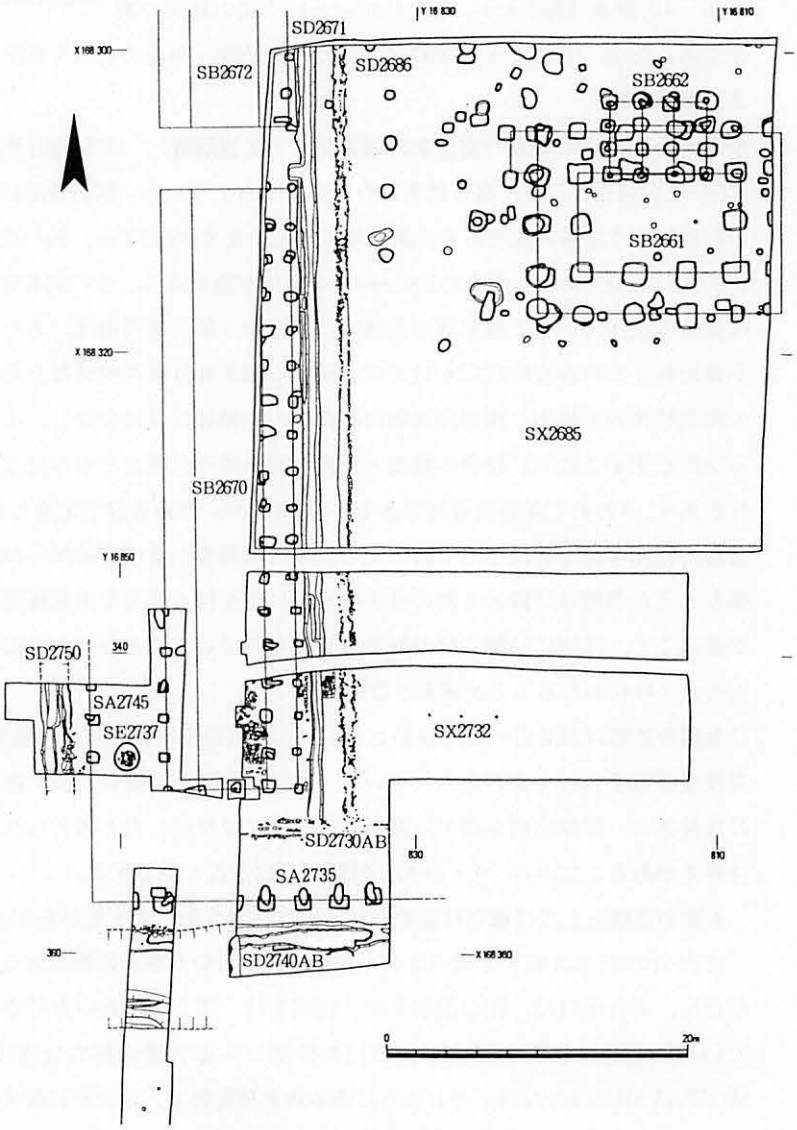
全体の地形は西北方へ緩く傾斜しており，古代の遺構はこの傾斜地に厚さ0.5～1mに及ぶ大規模な整地を行ってから造られている。検出した主な遺構は，出土遺物から見て，天武朝末期に造営され，藤原宮期を経て，奈良時代前半まで持続したと考えられる。そして建物・溝に造り替えがあることから，A・Bの2時期に分けることができる。

A期の遺構としては掘立柱建物3棟，掘立柱塀2条，溝4条がある。

建物SB2661は3間×2間の身舎の四面に庇が付いた東西建物である。柱間寸法は身舎の桁行が12尺，梁行が11尺，庇の出が9尺。柱掘形は一辺2mに近い方形で，柱はすべて抜き取られていた。北庇に柱筋を揃えて西6尺の位置にある2個の柱穴は階段用の柱であろう。建物SB2670はSB2661の西16mのところにある南北棟建物で，身舎が17間×2間，その東西に庇が付く。柱間寸法は身舎が8尺等間，庇の出が7尺。建物内部に玉石敷SX2731が施されている。石

敷は東庇の柱筋から2.5m東まで確認でき，建物内だけでなく周囲まで舗装されていたようだ。石敷面は建物中心部が高く，隅がやや低い。壁のない吹抜けの建物であろうか。建物SB2572はSB2670の北3.9m隔てて柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。東南の隅を検出したに過ぎないが，SB2670と同規模と想定できよう。溝SD2671は建物SB2670・2672のすぐ東を並行する南北溝で，両建物に共通する東雨落溝。幅1m前後，深さ約0.3mで，底面に黄褐色粘土を貼っており，元は石組溝であった可能性が強い。溝SD2730Aは建物SB2670の南約2mにある東西石組溝で，SD2671が接続する。B期に造り替えがある。

塀SA2735・2745は建物SB2670の南約7.5mと西約5.0mにある掘立柱の塀である。両者は鍵の手に接続して区画の西南隅を形成する。柱間は共に8尺等間。東西塀SA2735の柱掘形は一辺1.2mほどの方形で，深さ約1m，北川からの抜取りの痕が明瞭なのに対して，南北塀SA2745の柱掘形は一辺1mと若干小型。柱根が一ヶ所残っており，径約30cm，長さ約50cmで礎板上に立つ。溝SD2740は南の区画塀SA2735のすぐ南にある幅約5m，深さ0.5mほどの東西溝で，北岸には約1m間隔で丸太を打ち込んだしがらみの護岸がある。B期に北岸を造り替え幅を広げた。西の区画塀の外側にあるのが南北溝SD2750で，幅約2.6m，深さ0.4mほどである。東岸を雑に石で護岸する。

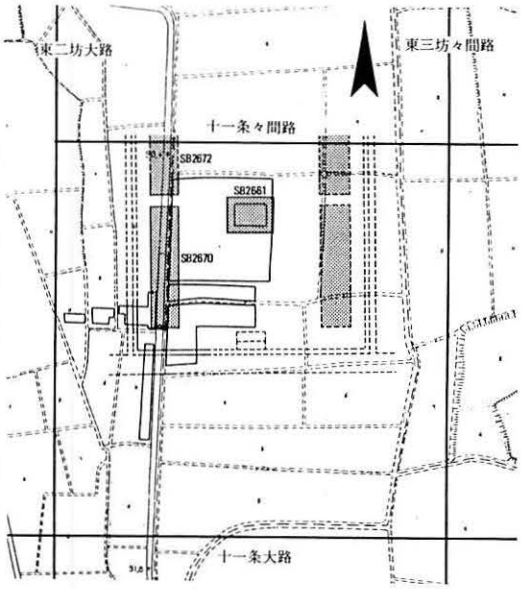


雷丘北方遺跡第1・2次調査遺構図（1：500）

B期になると，中心

建物 SB2661を廃して新たに SB2662が建ち，SB2670 の東の溝 SD2671が埋め立てられてSD2686が造られ，SD2730などが改修される。また，建物 SB2662以南の一面に大粒の礫を敷きつめる。建物 SB2662は 3 間× 3 間の総柱建物で，柱間寸法が東西 7 尺，南北5.5尺の東西棟である。柱掘形は1.0～1.3mの方形で，A 期の SB2661の柱掘形を切る。柱はすべて抜き取られていた。SB2661と中軸線が一致する。

出土遺物には土器，瓦，木簡，木製品，石製品などがあり，その多くは外周の溝と礫敷上面から出土したものである。時期的には藤原宮期を中心に 7 世紀後半のものが一定量を占め，奈良時代前半の土器が少量混じる。



雷丘北方遺跡復原図（1：2,500）

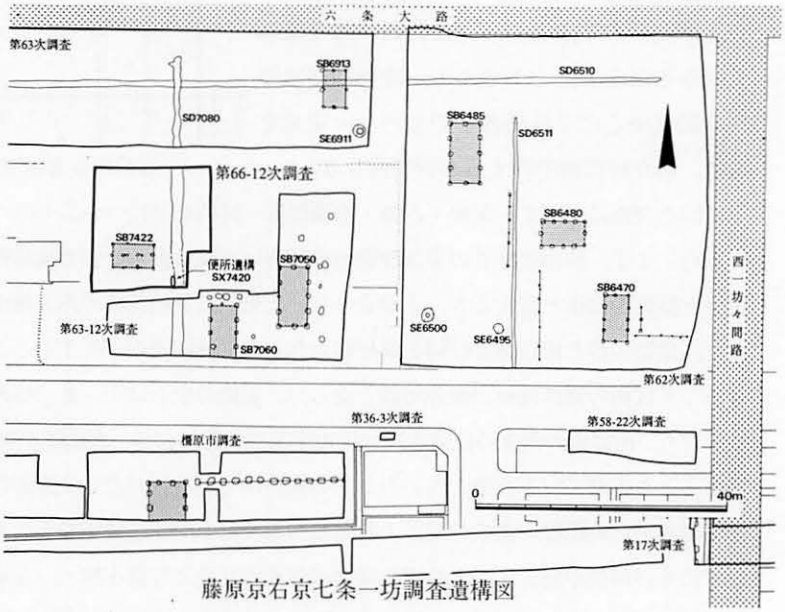
2回の調査によって，規模・占地・遺構配置・時期などについてその一端を明らかにすることができた。まず，四面庇付きの東西棟建物の西方に 2 棟の長大な南北棟建物が並ぶことから，これを正殿と脇殿の関係と捉えると，正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物の存在が想定できる。また，建物の西と南に掘立柱塀と溝が組み合った区画施設が存在するところから，正殿中軸線を折り返して区画の東西規模が推定可能となった。正殿の中心は十一条三坊西南坪の中心線にほぼ一致しており，南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。北脇殿が西北坪へ渡ることは確実で，少なくとも南北二坪を占地していたことも明らかである。ただし，南辺の区画施設から十一条大路までは約55mの距離があるので，これらは南限ではなく中心建物群を区画するものであろう。遺構配置にも計画性が窺える。北脇殿の南妻は正殿の北庇と柱筋を揃え，正殿の中軸線から脇殿の中軸線までの距離は100尺，同じく南の東西塀までが150尺，西の南北塀までが130尺なのである。さらにまた，正殿は四面庇付きで柱間寸法が大きく，また柱掘形もきわめて大型である。藤原京内で今までに判明している，一坪占地の邸宅跡である右京七条一坊西南坪の正殿（柱間桁行 9 尺，梁行 7 尺，掘形の大きさ1.1～1.7m）と比較すると，その大きさは際だっている。また，脇殿も東西両庇付きで，南脇殿の17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

しかしながら，この遺跡の性格についてはなお不明な点が多い。寺院・貴族の邸宅・官衙・宮などが候補として挙げられようが，建物の形態・規模，出土遺物などから前二者には無理がある。先に推定した建物配置について，北脇殿を南と同規模とし，正殿の北に後殿の存在を想定してみると，宮殿の典型とされる飛鳥稲淵宮殿遺跡のそれと極めて類似した形態となり，宮として性格づけることも不可能ではない。しかし，現段階では調査面積もごく一部に過ぎず，その性格解明には今後の継続的な調査を待ちたい。

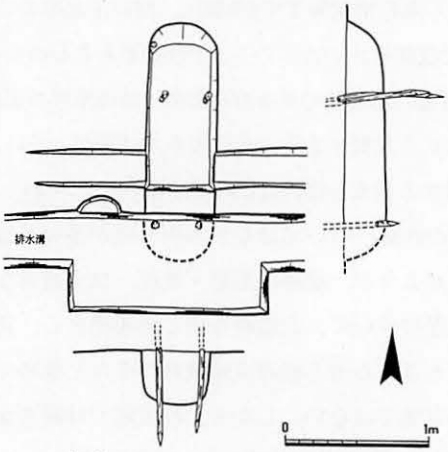
右京七条一坊の調査　第66－12次調査は橿原市高殿町における宅地造成工事の事前調査である。調査地は藤原宮の南面西門のすぐ東南にあたり，従前おこなった周辺の調査（第17・19・62・63次）の成果を合わせると，小規模な建物が井戸や塀を伴って点在し，戸籍に関連した木簡の内容や硯（転用硯）の出土が比較的多いなどの特徴が認められ，ここには何らかの公的な機関が存在した可能性が強い。

今回の調査で特記すべきは便所遺構 SX7420の発見である。これは発掘区の東南隅で検出した長さ1.6m，幅0.5mの長楕円形の斗面を呈する素掘りの土坑で，長軸を南北方向に置く。深さは現状で0.4mをとどめるのみだが，周辺の柱穴等の遺存状況から推し量ると，本来１m前後の深さであった。土坑内には東西30cm，南北85cmの間隔で４本の木杭が打ち込まれていた。土坑内の堆積土からは，木や木簡，土器細片，ウリなどの植物種子，ハエの蛹などの昆虫遺存体，魚骨などの食物残渣，寄生虫の卵などが出土した。同定された寄生虫卵には，回虫・鞭虫・肝吸虫・横川吸虫がある。昆虫や種子，寄生虫卵など便所に特有な遺存体の抽出に採用した各種の科学的分析方法は，今後同種の遺構が発掘された場合に取るべき指針となろう。また，当時の人々の食生活や衛生状況，生活環境などを復原する手がかりともなる。

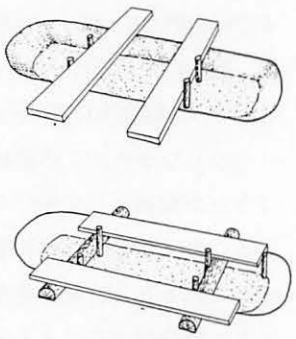
なお，本調査の成果のうち便所遺構に関しては単独の冊子『藤原京跡の便所遺構―右京七条一坊西北坪―』（奈良国立文化財研究所 1992年５月）として刊行済みである。



藤原京右京七条一坊調査遺構図



便所遺構（SX7420）平・断面図


便所遺構の復原二例

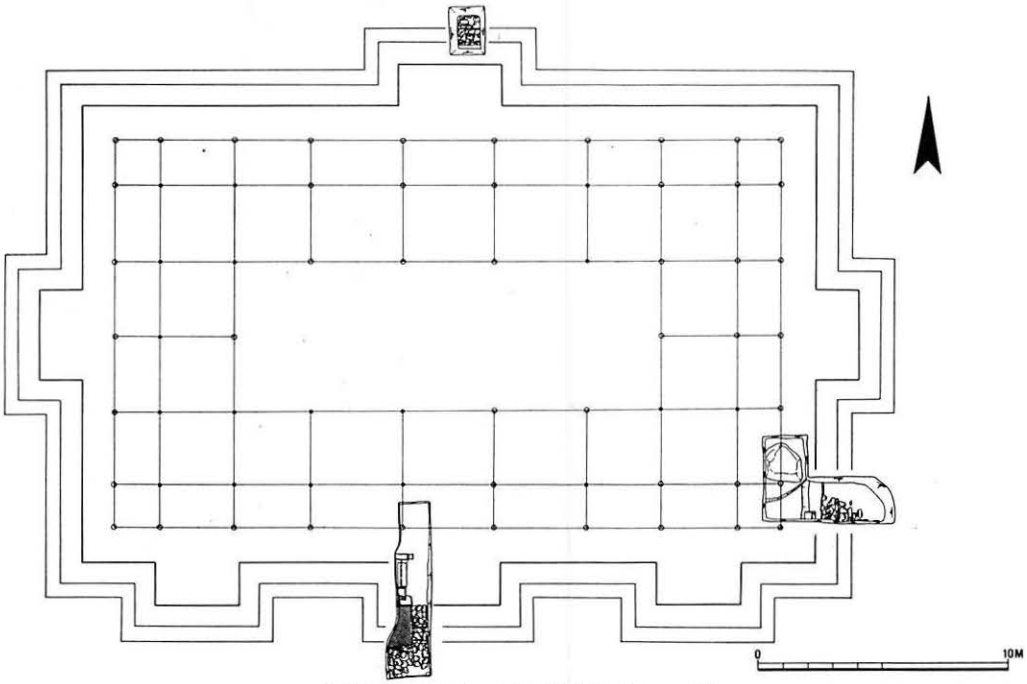
本薬師寺金堂跡の調査（右京八条三坊）　1992年度から実施する予定の，寺域や伽藍規模等を解明するための本格調査に先だって行った予備調査である。金堂跡南辺中央部および東南隅に近い東辺で各一箇所トレンチを入れた。発掘面積は小さかったが，基壇・階段の地覆石，雨落溝，その外方の玉石敷などを検出，遺構の遺存状況が望外に良好であることを確認，1990年の金堂基壇北辺の調査成果とあわせ，以下の想定が可能となった。

金堂基壇は東西29.5m，南北18.2mに復原でき，平城薬師寺と同規模。また，東西両塔心を結ぶ線と金堂心との距離は29.7m（100尺）で，これも平城薬師寺に等しい。基壇築成にあたって掘込み地業を行わないことも共通する。ただし階段前の犬走り幅は90cmあり，平城の40cmに比してかなり大きな数値を示す。裳階の存在を示す遺構は確認できなかったが，小型の軒瓦が出土し，その存在は推定できよう。平安時代初期の軒瓦が出土し，その頃まで建物が存続したようだ。中央階段正面の地覆石が抜き取られたのは14世紀後半頃である。　（山本忠尚）

藤原・平城両京の薬師寺金堂基壇の対比（※は復原した数値）

基壇規模	東西長	南北長	高さ	出	犬走幅	雨落溝幅	地覆石
藤原京	※29.5m	※18.2m	1.5m	3.2m	90cm	56cm	40×120cm
平城京	29.4m	18.3m	1.4m	3.2m（側柱）	85cm	50cm	36×120cm

階段周辺	階段幅	階段出	犬走り幅	溝幅	地覆石	耳石枘穴
藤原京	※4.2m	1.74m	90cm	55cm	38×101cm	15×20cm
平城京	4.2m	1.65m	40cm	40cm	36×100cm	15～20cm



本薬師寺金堂跡の調査遺構図（1：300）